

藏經音義の敦煌吐魯番本と高麗藏*

高田時雄

序説

佛教典籍の一大集成である大藏經は南北朝の頃すでに形作られ、その書寫が行われていたことが知られている¹。また一切藏經をすべて讀誦する篤信の在家信者も存在した²。僧侶においては藏經すべてを繙閱するものの數は必ずや少なくなかったであろう。事實、僧傳の類にはしばしばそういった事を傳えている。彼らが佛典を讀誦するに際し、その理解を助けるために藏經全體に對する音義の著述が要望されるのもまた當然のことであった。今日すでに亡佚してはいるが、六世紀後半、高齊の釋道慧に『一切經音』があり³、また六世紀末から七世紀初めにかけて智騫が『衆經音』を著したことが知られている⁴。

音義という書物の形式はもちろん佛家特有のものではない。むしろ儒家の經典讀解の傳統の中で形作られた典籍注釋の一形式であって、後漢から魏晉以來口傳によって保持されてきた經師の讀音が基礎となっている。藏經所收の各經論に對して音義を作ろうという發想は、したがって中國固有の學術の傳統から生まれたも

*小文の初稿は 2009 年 3 月 20 日、韓國ソウル大學において開催された「高麗大藏經と敦煌文獻」國際會議に於ける報告であるが、今回本『年報』に掲載するに当たって、會議に於ける討論及び會議で得られた新知見に基づき若干の補訂を加えた。小文はまた文部科學省科學研究費補助金「ロシアに所藏される敦煌吐魯番等發見漢文文獻の研究」（基盤研究 B、研究代表者：高田時雄）による研究成果の一部である。

¹ 『法苑珠林』卷第一百「興福部第五」、『大正藏』第 53 册第 1025 頁以下に、南北朝各皇帝による崇佛興福の事蹟を擧げる中に、しばしば一切經の書寫に言及する。

² 『陳書』卷二十七姚察傳「初察願讀一藏經、竝已究竟、將終、曾無痛惱、但西向坐、正念云、一切空寂。」『南史』卷六十九姚察傳もほぼ同文。

³ 『開元釋教錄』卷八「一切經音義」條下。

⁴ 『續高僧傳』卷三十。神田喜一郎「緇流の二大小學家」『支那學』第 7 卷 1 號、25-48 頁、のち『東洋學說林』（1948 年、東京：弘文堂；1974 年、京都：思文閣復刻）、『神田喜一郎全集』第一卷（1986 年、京都：同朋舎）に収録、また拙文「可洪隨函錄と行瑠隨函音疏」『中國語史の資料と方法』（京都大學人文科學研究所研究報告、1994 年）110-111 頁を参照。

のであることは疑いを容れない。また実際に音義の著述を行うにあたっては、文字音韻の學に通じたものでなくてはならなかった。

現存最古の藏經音義である『大唐衆經音義』（一名『一切經音義』）を著した玄應は、貞觀十九年（645）春、玄奘三藏の譯場が弘福寺に開かれたとき、唯一の字學大徳としてこれに参加した。新譯經典の文字の正誤を判定するのがその主たる仕事であり、今日に残る譯場列位にも「大總持寺沙門玄應正字」とか「大慈恩寺沙門玄應正字」としてその名が見える。字學の専門家として玄奘の譯場に入った玄應こそは一切經の音義を撰述する十分な資格を備えた人物であった。しかし玄應は大業を成就することなく没したため、その音義はすべての經論に及ばず、いわば未完成の作であった。『東域傳燈目錄』等には玄應の作として別に『大般若經音義』三卷が挙げられている。『大般若』六百卷は龍朔三年（663）十月にようやく譯了を見たものだが、この音義は玄應音義に含まれていない。恐らく龍朔三年以前に玄應が示寂し、『大般若經音義』も未完成であったため、『衆經音義』中には収録されなかったものと考えられている⁵。ともあれ玄應の音義は龍朔元年頃にはほぼ現在のかたちが出来上がっていたものであろう。玄應の音義は唐代を通じてすこぶる廣く行われた。

後世大藏經編成の基礎となる智昇『開元釋教錄』（開元十八年、730）には、佛典音義として玄應の音義以外に『新譯大方廣佛華嚴經音義』二卷が採られている。新譯『華嚴經』は則天武后自らが發議し、于闐から梵本を將來するとともに、實叉難陀を洛陽に招いて翻譯させたもので、その音義は慧苑の手になった⁶。このような経緯もあって特別の計らいで入藏したものと考えられる。他にも單行の經典の音義は目錄類にも散見し、敦煌からは『首楞嚴經』即ち唐譯の『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』十卷に對する音義や、『大般涅槃經』の音義が発見されているが、後世に對する影響から云えば、玄應、慧苑の二音義とは比較にならない。ちなみに一切經中に玄應、慧苑の二音義を缺くものはなく、どの一切經にも必ずこれら二音義が含まれる。

玄應の音義が藏經全體をカヴァーするものではなかったので、慧琳は建中末年（783）にその音義の撰述を開始し、元和十五年（820）これを完成した⁷。慧琳の音義は基本的に『開元釋教錄』の入藏録に據り、そのすべての經典に音義を施した⁸。

⁵この項、上掲神田論文に負うところ大きい。また拙文「玄應音義について」『玄應撰一切經音義二十五卷』（日本古寫經善本叢刊第一輯）解説冊、國際佛教學大學院大學學術フロンティア實行委員會刊（2006年3月）、1-8頁を参照されたい。

⁶成立は恐らく七世紀末から八世紀初。

⁷『宋高僧傳』卷第五「唐京師西明寺慧琳傳」。

⁸しかし慧琳の音義は、特に「此方撰集」典籍について、『開元録』との出入りが大きく、順序にも前後がある。特に慧琳音の最終卷は『開元録』に採らない典籍を數多く収録しているが、これ

玄應音義の用いることが出来るものはこれを採用し、すべて一百巻という浩瀚なものになっている。ついで後唐の長興二年（931）、可洪は河中府方山延祚寺藏經を底本とし、廣く諸寺の藏經を参考して『新集藏經音義隨函錄』三十冊を作った。その完成には十年の歳月を要し、後晉の天福五年（940）成書、上書して入藏を請うた。本書もやはり基本的には『開元錄』により函を逐って音義を附したものである⁹。これらの二音義はともに高麗藏に收められて今日に傳わったことは周知の所である。

また契丹の統和五年（987）、燕京崇仁寺の沙門希麟は慧琳の續編として『續一切經音義』十巻を作った。慧琳音義が『大乘理趣六波羅蜜多經』など『開元錄』以後に譯出された經論に及んでいないので、それらの音義を補ったのである。この書もまた高麗藏に収録されている。

その他には江南地域に行われた行瑠の『大藏經音疏』（また『内典隨函音疏』とも云う）五百許巻が存在する。この書はもと日本や朝鮮には傳わっていたらしいが、今日ではわずかに一部が残されているに過ぎない¹⁰。江南では福州版を初めと

は慧琳の住した西明寺の藏經に據った結果と思われる。

⁹慧琳の場合と同様、可洪の音義も「此方撰集」において『開元錄』とは異同があるが、慧琳ほどではない。

¹⁰拙文「可洪隨函錄と行瑠隨函音疏」『中國語史の資料と方法』（京都大學人文科學研究所研究報告）、1994年、109-156頁、を参照。『隨函音疏』については最近相次いで新発見があったので、それを含めてここに現況を補記しておきたい。まずこれまでよく知られたものとして、現在京都國立博物館に所藏される金粟寺藏經本の卷三百七摩訶僧祇律音義（守屋孝藏舊藏）がある。同じく金粟寺藏經本にはまた東京大學東洋文化研究所に所藏される瑠璃王經一卷と五苦章句經一卷に對する音義斷簡（南海伍元蕙舊藏）があるが、これは天地を裁斷して四行を一面として帖仕立てにしたもので、残念ながらすでに原姿を失っている。しかし『隨函音疏』の數少ない材料の一つであることには變わりはない。ところが昨年（2009）秋に中國のオークションに新たな一卷が出現した。これはヨーロッパから里歸りしたものと云われ、東晉三藏僧伽提婆譯『中阿含經』第四帙（卷第三十一至卷第四十）に對する音義で、『内典隨函音疏』としては卷第二六四（小乘經之六）に當たる。巻尾に「過雲樓收藏金石圖書」と「元和顧子山祕笈」の印記があり、元和（蘇州）の藏書家顧文彬（字子山、1811-1889）の舊藏であったことがわかる。このオークションの目録である『佛教文獻』（北京德寶二〇〇九年秋期拍賣會目録）には、寫卷のカラー圖版のほかに、趙前氏の「說說顧氏過雲樓舊藏的一件《金粟山大藏經》」及び翁連溪氏の「吉光片羽——宋人寫金粟山大藏經零卷」という文章が附されているが、その性格上ごく簡単な解説に止まっているのはやむを得ない。ちなみにこの寫本、目録に據れば、起拍價は50萬、參考價は60萬～80萬人民幣元となっているが、當該オークション會社のサイトに據れば、實際の落札價格は207萬人民幣元であったという。價格はともかく、新たな一卷が出現したことの意義は大きい。然るべき公的機關に歸したことを祈るばかりである。なおこの拍賣目録に『内典隨函音疏』が掲載されていることを筆者に通報されたのは、當時在外研究でハーバード大學に滞在中の關西大學玄幸子教授である。ここに誌して感謝したい。さて上掲拙文124頁以下に、高麗版大藏經再雕本のうち比較的初期に刷印され日本に齎されたもの（例えば大谷大學、増上寺、建仁寺所藏本）には、『隨函音疏』の卷第四百八十一と卷第四百九十が混入していることに言及しておいたが、驚くべき事に最近になってその版木二枚（うち一枚は片面）三張分が韓國で発見された。南權熙「敦煌地域關聯刊本 斗高麗大藏經」『奎章閣國際學術會議發表論文

して大藏經の刊刻がしばしば行われ、それらには函毎に字音帖が用意されたり、各帖末に音義の附されてたりする。その來歴と傳承關係については不明なことが多いが、帖末（卷末）音義の形式は明清時期の刻本大藏經にも踏襲された。

要するに、藏經の音義で今日まで傳わるものは、慧苑が華嚴一經の音義であるのを除外すれば、玄應、慧琳、可洪、希麟、行瑫の五家に過ぎない。それらはどのように傳承、受容されてきたであろうか。小文では敦煌吐魯番發見の斷片などを材料とし、些かその周邊を探るとともに、高麗藏の果たした役割を考えてみたい。

敦煌、吐魯番の佛經音義

敦煌、吐魯番からはともに可成りな數に上る各種の佛經音義が發見されているが、藏經音義としてもっとも多數を占めるものは玄應音義である。敦煌本についてはこれまでも既に詳しい研究があり¹¹、校録はすでに『敦煌音義匯考』¹²で試みられ、近刊の『敦煌經部文獻合集』¹³では餘程網羅的に集められている。吐魯番本についても近年ドイツ隊所獲品や大谷隊所獲品中に含まれる玄應音義の斷片に関する同定作業が進み、その成果が相次いで公刊されている¹⁴。トルファンのもものは小斷片が多く、まず綴合可能なものを集めて分類する作業が欠かせないが、それらが着實に進みつつあるのは喜ばしい。

集』2009年3月、高麗大藏經研究所、49-54頁。この二枚の版木は卷四百九十のもので、日本に傳わる『隨函音疏』の印刷に用いられた版木そのものであることはおそらく間違いない。南氏によれば第一、第二張の版木のサイズは25.1x77.3cm、版面の匡郭内寸法は21.8x48.4cm、第三張はそれぞれ34.3x77.5cm、21.4x42.2cmだという。残念ながら卷四百八十一の版木はまだ發見されていない。さらに日本の奈良西大寺に藏される磧砂版『大般若經』の卷第一から卷第四、卷第八から卷第十一までの卷末音義は『隨函音疏』とは題されていないが、実際には『隨函音疏』のテキストを利用したものであることが分かっている（上掲の拙文128頁）。磧砂版の『大般若』附載の音義は大部分が福州東禪寺版のものを援用するが、最初の部分のみに『隨函音疏』が用いられているのである。したがって要約すると、行瑫の『内典隨函音疏』は現在、金粟寺寫本藏經本、高麗版大藏經再雕本に混入した刊本、磧砂版『大般若經』の卷末音義に利用されたもの、という三つの形態で殘存しているということになる。もちろん一部が他書に引用されたものはここに含めない。

¹¹石塚晴通「玄應《一切經音義》的西域寫本」『敦煌研究』1992年第2期、54-61頁；石塚晴通・池田證壽「レニングラード本一切經音義——Φ二三〇を中心として」『訓點語と訓點資料』第86輯、1991年、1-44頁；石塚晴通「ペテルブルグ本一切經音義——Φ二三〇以外の諸本」；徐時儀『玄應《衆經音義》研究』北京：中華書局、2005年3月。

¹²張金泉・許建平著『敦煌音義匯考』、杭州大學出版社、1996年12月。

¹³張湧泉主編・審訂『敦煌經部文獻合集』（北京：中華書局、2008年8月）第十冊。

¹⁴西脇常紀『ベルリン・トルファン・コレクション漢語文書研究』、京都大學総合人間學部西脇研究室、1997年5月刊、83-96頁；同『ドイツ將來のトルファン漢語文書』、京都大學學術出版會、2002年7月刊、47-66頁；張娜麗『西域出土文書の基礎的研究——中國古代における小學書・童蒙書の諸相』、東京：汲古書院、2006年2月刊、359-367頁。

ロシアの玄應音義の場合も小断片が多く、研究を妨げる要因となっている。上掲の『敦煌經部文獻合集』ではこれら小断片を丹念に綴合しているのは敬服に値するが、ロシアの玄應音義小断片の多くは實は敦煌藏經洞から出たものではなく、吐魯番所獲と思われる。いま一例を挙げると、『經部合集』が「一切經音義（九）」として収録する断片群がそうである。これらは11種からなるが、すべて玄應音義卷六の「法華經音義」の部分であり、掲出字をやや大きく出し、注文はそれよりやや小さく書くものの雙行にはしないという形式が一致するほか、かなり稚拙な書體もすべてに共通する。そして背面にはウイグル文が書寫されている點も同じである。したがってこれらが同一寫本の断片であることは疑いを容れない。しかし實はこのような特徴をすべて備えた断片がドイツ隊の將來品中にも存在するのである。Ch/U6782d, Ch/U6784, Ch/U6788, Ch/U7279, Ch/U7447, Ch/U7448, Ch/U7449などがそれで、これらはすべて同一の「法華經音義」の断片である。ドイツ隊の將來品が吐魯番所獲であることは否定できないので¹⁵、ロシアの断片群もまた吐魯番所獲品であることが知られる。一切經音義に關して言えば、Дx256+Дx583, Дx965V, Ф230など、まず間違いなく敦煌文獻であると考えられる寫本はともかく、その他の『俄藏敦煌文獻』所收小断片は敦煌ではなく吐魯番出土であるものが多いと思われる。今後、一層の注意を必要とする。

さて敦煌の寺院で玄應音義が確かに利用に供されていたことは、經藏の點檢記録が残っていることから分かる。例えば S.5895 には「一切經音義卷第一、第三、第九、弟拾貳、弟廿叁、弟廿四、已上陸卷現在、餘欠」とあり、P.4788 には「一切論音義第十七、第十八、第十九、第二十、第□□、第二、已上陸卷今藏見在、餘者竝欠。題雖稱經音、竝是論音義」、また北臨 631 に「一切經音義卷第一、第十七、第……、已上肆卷、竝依次剩、重出」とある。また玄應音義全二十五卷の闕本を補い補寫するに際してその割當てを記録した文書も存在する (S.3538V)。これらは九、十世紀の歸義軍期のものと思われ、當時でもなお一切經音義の點檢補寫が行われていたことは注目し得る。

敦煌にせよ吐魯番にせよ、唐代、中央の諸制度が各地に等しく行われていた時代には、寺院における經典の管理、佛典の書寫讀誦などあらゆる制度は、長安で作られた規範に則って一律に行われていたと思われる。そのような時代には玄應音義の權威は極めて高いものがあつたはずで、佛典の讀解の基準として一般にこれが用いられたことは不思議ではない。玄應音義の音韻體系は切韻の體系に非常

¹⁵ これらの断片には“T II Y”で始まる整理番號が附されていて、ドイツの第二回探險隊がヤールホト（交河故城）で獲得したものであることが分かる。これらの断片については西脇上掲『ドイツ將來のトルファン漢語文書』58-66 頁を見よ。

に近く、唐代の讀書音を忠實に傳承するものである。この音が佛典讀誦の規範として大きな拘束力を持ったのである。ところが八世紀の末から中央の政治的霸權がこれらの地域に及ばなくなると、しだいに言語的規範も著しく動搖するに至る。敦煌では60年以上に及ぶ吐蕃支配期のあと、848年に張議潮が擧兵し權力を漢人の手に奪回すると、張氏、曹氏による歸義軍政權の時代となる。特に十世紀の曹氏歸義軍時期は宛然一箇の獨立した小國家であり、自然と言語も本來の方言が表舞臺に登場し、規範的な地位を獲得するようになる。この時代には佛典の讀誦もまた土着の河西方言によって行われたのである。このことは十世紀のチベット文字やコータン文字によって轉寫された佛典などから明確に論證することが出来る¹⁶。

一方、吐魯番盆地では長安の勢力がここから手を引いた後、ウイグル人の支配下に入り、やがて漠北のウイグル可汗國が瓦解すると、西遷してきた彼らの一派がここにウイグル國を樹立することとなる。そのウイグル國では高昌國及び唐の直轄支配時期の長きにわたる漢文明の影響を受けて、中國佛教が盛んに行われた。しかしその中でやがて土着の漢語方言音に基づくウイグル独自の漢字音が形成され、佛典の讀誦などもこの字音を用いることになった¹⁷。吐魯番の土着方言は敦煌と同じく廣い意味での西北方言に屬し、若干の個別的相異點はあるもののよく似た音系を持っていた。

宋の太平興國六年(981)に高昌ウイグル國に出使し、雍熙二年(985)に歸國した王延徳はその旅行記のなかで「佛寺五十餘區、皆唐朝所賜額、寺中有大藏經、唐韻、玉篇、經音等」と報告している。高昌ウイグル國において、寺院では漢文佛典が行われ、『切韻』や『玉篇』などの辭書とともに『經音』も存在したのである¹⁸。ウイグル國における強固な漢文化の傳統を想見できる。いずれにせよこの『經音』が玄應音義であることはまず間違いのないところである。上に觸れたロシアとドイツに分散所藏される玄應音義は、ウイグル國時代のものであったことも思い合わされる。

敦煌や吐魯番では、唐の中央から政治的に引き離された後も、玄應音義はなお用いられ續けた。それはもちろん保守的な傳統による部分も大きいと思われるが、唐代讀書音を體現する玄應音義は、時代の推移と共に變化して出來上がった方言における音韻の區別を十分に包攝することができたので、利用の面で特に矛盾が生じなかったであろう。とはいえより簡便な直音音注を用いた經典の難字音注の

¹⁶拙著『敦煌資料による中國語史の研究——九・十世紀の河西方言』、1988年、東京：創文社刊、特にその186-188頁を参照。

¹⁷拙文「ウイグル字音考」『東方學』第70輯(1985年7月)134-150頁；同「ウイグル字音史大概」『東方學報・京都』第62冊(1990年3月)329-343頁。

¹⁸王明清『揮塵錄・前録』卷四。また『宋史』卷四百九十、外國六、高昌國條。

類は敦煌でも吐魯番でも盛んに作られ、個人的な使用に供された。それらの音注は敦煌では河西方言を反映しており、吐魯番ではウイグル字音を反映していることは言うまでもない。ここでは唐の盛時におけるのとその性格はやや異なるにせよ、敦煌でも吐魯番でも玄應音義が引き継ぎ影響力を保持し続けた点を指摘しておけばそれで足りる。

ただ敦煌、吐魯番の玄應音義は、形式、内容において必ずしも一様ではなく、幾つかの類型に分かれる。また実際の使用に應じて簡略化された寫本も報告されている。内容の點では高麗藏をはじめとする刊本大藏經のテキストとの間にしばしば異同が見られるが、これらはむしろ日本に傳わる古寫本に近い場合が多い。玄應音義の日本古寫本についても近年調査が一段と進んでいるので¹⁹、これらのテキストを網羅的に校合することにより、近い將來、玄應音義の本來のテキストを復元できる日が來ることが期待される。

姜亮夫『敦煌——偉大的文化寶藏』に「在巴黎藏中，連玄應的『一切經音義』（三〇九五），與慧琳的『一切經音義』（三四二八）都有了」というが²⁰、實際には敦煌からは慧琳音は發見されていない。思うに姜亮夫のいう P.3428 というのは P.3429 の誤りで、これは『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』に對する音義である。慧琳の音義は大中五年（851）に入藏を奏請したと傳えるが²¹、唐末亂世の影響もあり、廣く流通するには及ばなかった。まして刊刻されることはなかった。五代後周の顯德年間に、高麗國の使者が浙中に赴いて慧琳の經音義を求めたが、得ることが出來なかった²²ことも、その流布が限られた範圍に止まったことを物語っている。したがって敦煌、吐魯番にも傳わらなかったのである。

玄應以外の音義で敦煌から發見されたものとしては可洪の『新集藏經音義隨函錄』があり、その寫本斷片が數點存在する。上に觸れたように『隨函錄』は後晉の天福五年（940）に完成した。十世紀、敦煌の歸義軍政權は五代の中原王朝と往來があり、その結果としてこの音義も敦煌に齎されたものとも考えられるが、實際には宋代になってから傳わったのである。敦煌本『隨函錄』の一斷片（P.2948）には版心の文字を正文中に混入して寫していて、それを高麗藏の『隨函錄』と比較すると版心の位置までぴったり符合する。ただし高麗版が敦煌に傳わったと考えるこ

¹⁹ 日本古寫本の影印には『一切經音義』（上）（中）（下）（「古辭書音義集成」第7卷～第9卷、東京：汲古書院、1980年）があり、下卷に収録諸本の詳しい解題（小林芳規執筆）がある；また『玄應撰一切經音義二十五卷』（「日本古寫經善本叢刊」第一輯、國際佛教學大學學術フロンティア實行委員會、2006年）は、これまで紹介されていない日本古寫本數種を影印刊行したもので、近年の新しい成果の一である。

²⁰ 上海古典文學出版社、1956年刊、125頁。

²¹ 『宋高僧傳』卷第五「唐京師西明寺慧琳傳」、『大正藏』第50冊第738頁。

²² 『宋高僧傳』卷第五「唐京師西明寺慧琳傳」、同上。

とは時代の前後関係から不可能である。したがって敦煌寫本と高麗藏の兩者はともに同一刊本に由來すると考えねばならない。また高麗版の闕筆の状況を見ると、宋初の避諱を確認でき、したがってこの本が宋版であったことを知り得る。宋版の『隨函錄』が一方では敦煌に傳わり、一方では高麗に傳わったのである²³。慧琳が傳わらず、より成立の晩い可洪が敦煌に傳わったということは多少意外の感があるが、歴史的背景の然らしめるところで、慧琳にとっては不幸なことであった。

ドイツ隊所獲の吐魯番寫本斷片中に希麟の『續音義』が見られるという報告がある²⁴。高昌ウイグル國は契丹（遼）と相當密接な交渉があったので、希麟の音義が吐魯番に來ていた可能性は十分にあるが、實見したわけではないので、ここには簡単に觸れておくに止めたい²⁵。

寫經から刊經への變遷と藏經音義

上に見たとおり、敦煌、吐魯番から發見された藏經音義は主に玄應の音義と可洪の『隨函錄』とであった。希麟の『續音義』は吐魯番に來ていた可能性があるが、しかし肝心の正編である慧琳音は傳っていない。新譯經典の参考のために、『續音義』だけが將來されたのかも知れないが、詳しい事情は不明である。

さてこのような敦煌、吐魯番文獻における藏經音義の殘存状態は、音義史の中でどのような意味をもつであろうか。小文の初めに述べたように、音義というジャンルは中國の傳統的注釋の一形態であった。唐初に撰述された玄應の音義は、多數の經籍や小學書を引いて典據としており、博引旁證、非常に學術的香氣の高い著作となっている。小學書としては『爾雅』『廣雅』『釋名』『說文』『字林』『蒼頡篇』『三蒼』『方言』『通俗文』『字書』『埤蒼』『聲類』『韻集』などが引かれているが、これらは後世失われたものも多く、清朝學者が輯佚を行うに際して大いに利用されることとなった。さらに玄應音義が反映する音系は『切韻』に近く、隋唐期の非常に規範性の高い讀書音であるという意味でも、その高踏的な性格を窺うことが出来る。端的に言えば貴族的色彩が濃厚だと言えよう。

慧琳は玄應に比べ卷帙がより浩瀚なため、輯佚の材料としては玄應より更に高い價值を有するが、如何せんその存在が中國に知られるのはずっと後、光緒年間の

²³拙稿「可洪『隨函錄』と行瑠『隨函音疏』」『中國語史の資料と方法』（京都大學人文科學研究所、1994年3月刊）、118-124頁。

²⁴上掲の西脇『ドイツ將來のトルファン漢語文書』40-41頁。八〇年代初めに舊ソ連から東ドイツに返還された文書中に含まれる未整理の斷片中から見いだされたという。

²⁵またカラホトの遺跡からも希麟の續音義が出たという報告がある。聶鴻音「黑城所出《續一切經音義》殘片考」『北方文物』2001年第1期、95-96頁。

ことである。ところで慧琳音義の反切は秦音を反映すると言われ、そこに安史の亂を隔てた中國社會の變化に伴う言語規範の弛緩が觀察される。佛典の讀音の規範もまた各地方毎それぞれに多様化していく兆しが見られる。上に十世紀敦煌における河西音採用につき言及しておいたが、地方化の傾向は多かれ少なかれ中原においても同様だったのである。唐代も後半以降になると、識字層の擴大によって、讀書の形態そのものが餘程自由になってくる。讀音や訓詁が限られた範圍においてのみ傳受されるという風なことではなく、必ずしも師承を経ずに行われるようになってきた。慧琳は玄應の補完を目指して著されたものだが、二書のあいだに介在する時間の推移はやはり相當に大きいと言わねばならない。

さて五代後晉の世に出現した可洪『隨函録』に至っては、もはや音義の性格が大きく變化していることに氣付く。この書物の主眼は佛典讀誦の音的規範を提供するというよりは寧ろ、藏經中に見られる俗字を糾正することにあつた。可洪は方山延祚山の藏經と上方栢梯山の兩藏を底本としながら、多數の藏經を用いて字句の異同を具さに指摘する。見つかるままに引用される藏經の名を挙げれば、長水藏、麻谷藏、千佛藏、渾家藏、廣濟藏、開元樓藏（また樓藏とも）などがある。この時代はまさに木版印刷が出現し始めた頃で、寫本時代の末期に屬するが、各地の寺院に置かれた藏經には相互にかなり大きな文字の異同が存在したのである。可洪が直面したのはこうした一種の混亂状態であり、その状況に對して正しい規範を提示することこそが急務と感じられた。隨函音義の形式を採ってはいないが、可洪の後約五十年、契丹の僧行均が『龍龕手鏡』を著したのもまた同じ問題意識に出るものである。ちなみに『龍龕手鏡』の斷片は吐魯番から見つかっている（Ch1874）。

可洪の書物が成つてのち三十年餘、最初の刊本大藏經たる開寶藏の刊刻が開始される。これ以降次第に寫經から刊經の時代に移り變わっていくわけであるが、しかし兩者が並存する時代もまたかなり長い間繼續する。行瑫の『内典隨函音疏』は残念ながら今日完帙を傳えていないが、零卷が若干残っているのでその内容が分かる。『宋高僧傳』の「行瑫傳」²⁶によれば、行瑫は湖州長城の人で、後唐の天成年間（926-929）に會稽の大善寺に至り、藏經の批閱を事としたが、郭遂の音義が疏略で、慧琳の音義が傳わらないことを慨き、『大藏經音疏』五百許卷を述べたという。彼は後周の顯德三年（956）に示寂したから、可洪とはほぼ同時代人と見ることが出来る。その音義の特徴は可洪と同じく藏經間の誤字乃至異體字を列擧し、最後に正體字を掲げるというスタイルである。南北でほぼ同様な書物が作られたということに、強い時代の要請を感得し得る。ともに寫本時代の掉尾を飾る音義と稱してよい。

²⁶ 『宋高僧傳』卷二十五、『大正藏』第50册871頁上欄。

刊本時代の音義について詳述することは小文の目的を逸脱するが、この場を借りて簡単に筆者なりの見通しを述べておきたい。刊本の大藏經は大きく三類に分けられる²⁷。開寶藏が出現した後、高麗では早くも顯宗の時代（1010-1031）に大藏經の刊刻を行っている。開寶藏を底本とした復刻であったといわれる。その經板が蒙古の入寇によって兵火に罹ると、高宗の時代に再び藏經彫印の大業を發願し、その三十八年（1251）に功を畢えた。これが今日まで傳存する高麗大藏經である。開寶藏の復刻と目されるものにはまた金藏がある。これは1933年に山西省の趙城縣廣勝寺から發見されたため、趙城藏とも呼ばれている。これらが第一類。第二類は契丹の大藏經で、これは唐代の長安における正しい寫本大藏經を受け継ぐものとされていて、敦煌本や日本の奈良平安朝の古寫經の多くもこの系統に屬する。また房山石經の遼代に彫られた部分は底本に契丹藏を用いているので、傳存すること極めて稀な契丹藏の面目を窺うに足る。第三類は中國南方地域に行われた大藏經で、福州版（東禪寺版及び開元寺版）、思溪版（前後二版）、磧砂版、普寧寺版など宋元時期に刊刻された諸藏から、明清時期に至るまで非常に多數の藏經が作られ今日まで傳わっている。第三類の藏經では、はじめ東禪寺版には字函ごとに一帖の字音帖が附けられていた。同じ福州で開板され形式をほぼ同じくする開元寺版ではこの字音帖を缺くとされる²⁸。さらに思溪版になると獨立した字音帖は無くなり、各帖末に音釋を付ける様式に變化した。その後の磧砂版や普寧藏、明代の各版藏經（洪武南藏、永樂南藏、永樂北藏、嘉興藏）などはすべてこの形式を踏襲することになった。音釋の内容は福州藏の東禪寺版のやや詳しい、といっても玄應や慧琳には遠く及ばないが、それを引き継いでいる場合もあり、また新たにより簡略化された音釋に取り替えている場合もある。これら各藏經における卷末音釋の實態についてはほとんど手が付けられておらず、詳しい調査は今後の課題である。しかし極めて大雑把な概括をすれば、これらの音釋からは玄應や慧琳の音義に見られるような學術の香氣は微塵も感じられず、單に轉讀の際に字音を確認するための方便を提供するだけのものになっているように思われる。

²⁷この分類法は竺沙雅章氏の説に據る。同氏の「漢譯大藏經の歴史——寫經から刊經へ」（大谷大學、1993年刊）を参照。

²⁸小川貫式『大藏經——成立と變遷』（京都：百華苑、1964年刊）49頁。但し最近の調査では開元寺版にもかなり字音帖が附されているという。山田健三「漢譯版經附載音釋に關する基礎的研究」（平成15・16年度科學研究費研究報告）、2005年、16頁。同「福州版一切經附載音釋の形成過程」『人文科學論集文化コミュニケーション學科編』43（2009年）、1-12頁

高麗藏の貢獻

現在、高麗藏には以下の音義が含まれている。

- 玄應一切經音義二十五卷 (K.1063)
- 慧苑新譯大方廣佛華嚴經音義 (K.1064)
- 新集藏經音義隨函錄三十卷 (K.1257)
- 希麟續一切經音義十卷 (K.1497)
- 慧琳一切經音義一百卷 (K.1498)

音義について高麗藏は極めて豊富であるといえよう。これらのうち前二者は開元録所収で、どの藏經にも必ず含まれるものであるから、とくに問題とするには当たらないが、後の三つについてはここに些か辯じておく必要がある。音義の保存に関する高麗藏の貢獻はまさにここに盡きると思われるからである。これらの音義は高麗藏がなければ今日に傳わらなかった。慧琳『一切經音義』一百卷は、忍澁上人(1645-1711)の努力により京都建仁寺所藏の高麗藏本に據って翻刻が始められ、江戸時代の元文三年(1738)に京都鹿ヶ谷の白蓮社から刊行され²⁹、希麟『續音義』も延享三年(1746)に同じく白蓮社から印行された³⁰。忍澁上人は建仁寺所藏の高麗藏を用いて黄檗版大藏經を校訂し『大藏對校録』を作ったことで有名だが、その過程で高麗藏に含まれる慧琳音義を發見し、その重要性に氣付いた。彼はその刊刻を志したが、正徳元年(1711)、十餘卷を終えたところで示寂した。弟子たちは師の始めた事業を繼續し、長年月をかけて元文三年ようやく全一百卷の刊行に漕ぎ着けたのである。珂然『獅谷白蓮社忍澁和尚行業記』³¹卷下には、忍澁が慧琳音義翻刻を發念した経緯を以下のように記している。「又唐京師西明寺慧琳師所撰一切經音義一百卷，支那南北二藏竝闕漏不收，唯有建仁藏室朝鮮經本收在之。師乃覽之，猶痿人之得起，盲者之得視，亢陽降甘雨，災癘逢良醫，飢而食，渴而飲者，不能自己，懽抃無量。即使罽繕書，欲刊版傳之未聞，乃校閱之(師囑校閱於洛西五智山如幻大徳³²)，已刻梓十餘卷。師疾病，終不起，無成全刻，杳從冥往。」忍

²⁹忍澁上人による慧琳音義の再發見及びその弟子たちによる刊刻事業については、神田喜一郎「忍澁上人と慧琳音義」に詳しい。『神田喜一郎全集』第二卷(京都：同朋舎、1983年)289-297頁。なお昭和六年(1931)當時の京城帝國大學法文學部から海印寺の經板を用いた再刷本が出版されている。

³⁰校訂に當たったのは内州(河内)交野郡山田郷の万法藏院の比丘行願顯明であったと卷末に記されている。また封面ウラには「燕京崇仁續一切經音義十卷、高麗國大藏都監奉敕雕造。其本傳在本山、今新上木播之海内、印板置當院矣。大日本延享二年乙丑冬十一月、高野山北室院沙門堯昌謹誌」とあり、希麟『續音義』の翻刻には高野山所藏の高麗藏が使用されたことが分かる。

³¹享保十二年(1727)刊行。また『淨土宗全書』卷十八(大正二年刊)所収。

³²五智山如幻は眞言宗の僧で、字は道空。智積院第七世化主運徹の弟子で、寶曆元年(1751)に没した。悉曇や小學に詳しい人物だったようで、音義の校勘には適任者であったと想像される。『高

激が慧琳音義を見つけたときの感激が如何に大きなものであったかが分かる。

慧琳の日本における翻刻は中國では乾隆三年に当たるが、この本はすぐには中國に傳わらず、清末に日中間の往來が頻繁になった頃、ようやくこの本が中國に齎され大きな衝撃を與えることになる。楊守敬はその『日本訪書志』に、白蓮社翻刻本によって慧琳音義を著録し³³、最初島田蕃根から本書を贈られたとき、それが玄應の音義でないことを知って驚喜したと書いている。その後楊守敬は書肆に存する白蓮社版をすべて買い占めると共に、京都になお版木が保存されていることを知るや、數十部を印刷させて上海に送った³⁴。慧琳音義はかくして中國の學界に廣く知られるようになる。その第一の功勞者は楊守敬であった。

また同じく可洪の『隨函錄』は1934年、日本の希觀典籍蒐集會によって増上寺所藏の高麗版が影印され、一般の眼に觸れるようになった。近年『隨函錄』に対する關心が高まりつつあるが、慧琳には遠く及ばない。いずれにせよ慧琳、希麟、可洪の音義が傳承されるについては、すべて高麗版が根源となっていることは紛れもない事實である³⁵。

では高麗藏はどこからこれらの音義を得たのであろうか。上で見たとおり、『宋高僧傳』の「慧琳傳」によれば、高麗では周の顯徳年間(954-959)に使者を浙中に派遣し『慧琳音義』を求めさせたが、得ることが出来なかったと傳えている。これは同時期に湖州に居た行瑫が慧琳の音義が傳わらないことに發奮してその『隨函音疏』を著したという事實ともよく符合する。高麗では宣宗の三年(1086)、大覺國師義天が自ら渡海入宋し、また遼や日本に書を發して佛典章疏の博搜に勉め、續藏の編纂を試みた。その成果は『新編諸宗教藏總録』三卷(1090)に見えている。音義について云えば、そこに『一切經音義』一百卷(惠琳述)、『續一切經音義』十卷(希麟述)が載せられているので、これら二音義は義天の時に高麗に將來されたものであることがわかる³⁶。しかし高麗藏初彫本は續藏も含めて蒙古の厄に

楠順次郎遺稿「日本梵語學史」集成』(1984年、名著普及會)202-203頁。

³³『日本訪書志』卷第四、第二十葉以下。楊守敬は題目下に注して「日本藏高麗藏本」とするが、解題中に「此本從高麗藏本翻出」と言っているので、實は白蓮社本であると知られる。

³⁴『日本訪書志』卷第四「余既見此本、凡書肆中所有皆購之、以餉中土學者。厥後又知其板尚存西京、又屬書估印數十部、故上海亦有此書出售、皆自余披剔而出也。」

³⁵慧琳の『一切經音義』、希麟の『續一切經音義』さらに可洪の『隨函錄』は、ともに明治13年(1880)から18年(1885)にかけて東京の弘教書院から刊行された『大日本校訂大藏經』(いわゆる『縮刷藏經』)に、高麗藏に據ったテキストが収録された。次いで中國では上海の頻伽精舍が宣統元年(1909)から民國二年(1913)にかけこれを『頻伽藏』として復刻したので、一般にも廣く入手し得るようになった。ただこれらの藏經は鉛活字で印刷され、そのテキストは極めて劣悪であるため、近年ではほとんど用いられない。

³⁶徐時儀「慧琳《一切經音義》版本流傳考」『古籍整理研究學刊』(1989年第6期)は『遼史』卷二十三(道宗本紀三)の記事「(咸雍八年(1072)十二月)庚寅、賜高麗佛經一藏」に據って、この時に慧琳音義も傳わったとする。その可能性は否定し得ないが、ここで言われる「佛經一藏」に

罹ったとすれば、一旦傳わったこれらの音義もまた滅びた可能性がある。これらは高麗藏再彫の際に補刻したと考えるべきかも知れない。いずれにせよその底本は契丹藏であったと思われる³⁷。

では『隨函録』の來源はどうであろうか。如何なる藏經が『隨函録』を収めていたかは不明で、「敕を以て大藏に編入した」とする説もあるが³⁸、極めて疑わしい。恐らく長く藏外の著作として扱われていたものであろう。しかし『崇文總目』、『宋史藝文志』、『通志藝文略』などにこの書を著録しており、宋代に刊本が存在したことは間違いない。高麗藏本はこの宋版を復刻したのである。しかし高麗義天の將來目録に本書が見えないことからすれば、その傳來はやや後のことと考えるべきであろう。

いずれにせよ高麗藏がこれらの音義を収録して呉れていたことは幸いであった。とりわけ慧琳の音義は敦煌、吐魯番はおろか日本にもその影を見いだすことが出来ず、唯一高麗藏に據ってのみ今日に伝えられたのである。敦煌、吐魯番は現存する材料から見る限り、主として玄應音義の世界である。しかし十世紀になると敦煌には『隨函録』も傳わり、吐魯番には恐らく契丹から希麟も傳わっていたらしい。もちろんこれらは玄應が盛んに利用された頃とは異なる時代相を背景にしている。一方、高麗藏には玄應、慧苑、慧琳、可洪、希麟の音義がすべて収められていることは偉觀というほかない。音義史の立場から云えば、寫本時代の音義がほぼここに網羅されているということになる。

(作者は京都大學人文科學研究所教授)

藏外典籍である慧琳音義が含まれていたかどうかは必ずしも確實ではない。ただこの時點でなかったにせよ、慧琳音義が高麗に傳わったのが契丹からであったことは恐らく間違いない。次の注 37 を参照。

³⁷李富華・何梅『漢文佛教大藏經研究』(北京：宗教文化出版社、2003年) 151頁に、契丹藏の内容を復元し、最後の「晉」帙に希麟を、「楚」帙から「滅」帙を慧琳に配當している。徐時儀『玄應《衆經音義》研究』はこの順序に疑義を呈しているが(80頁注5)、高麗藏が正にこの順序を採用していて、それが契丹藏に據ったものだとすれば、本來このような順序であったと考えざるを得ない。ところが元の弘法藏の順序は慧琳→希麟となっていたらしい。弘法藏を基礎とした勘同目錄『至元法寶勘同總録』卷十「東土聖賢集傳」に掲げる順序はそうになっている。とすれば希麟→慧琳の順序は非常に特徴的で、高麗藏が契丹藏の順序を承けたものとする根拠ともなる。

³⁸『佛祖統記』卷四十二、晉高祖天福四年(939)條。